

「社会学的方法」を取り入れた。このような視点を取り入れるきっかけとなったのは、マックス・ヴェーバーであったが、そこからマルクス主義的な理論をどう扱うかがトレルチの思考を捉えた。トレルチはこの理論を批判的に取り入れ、偏った一面的な歴史研究のあり方に反対し、多元的な歴史の構想を主張した。トレルチは社会学的な方法を導入することによって、時代を形作る様々な構成物の相互関係を捉えようとした。つまり、トレルチがもつ複雑な思考に、さらに社会学的な視点を取り入れられることによって、彼の〈文化史〉的方法はますます複雑さを帯びるようになったといえる。

トレルチは「歴史学的方法」に、さらに「社会学的方法」を取り入れることによって、単に精神性の高いものを捉えようとしただけでなく、現実的な側面にも目を向け、およそ人間の営みすべての相互関係を捉えようとした。このような態度がトレルチ独自の〈文化史〉概念を形成し、従来の「文化史」とは異なった視点を生み出した。トレルチの有名な、当時の通説を覆す近代の開始についてのテーゼや、かの浩瀚な『キリスト教教会と諸集団の社会教説』はこの産物であるといえる。

トレルチの〈文化史〉概念は、彼が最晩年に集中的に取り組んだ「歴史主義の問題」にも連なるものである。トレルチの〈文化史〉概念を繙き、トレルチが実際に描いた〈文化史〉を明らかにすることは、トレルチの思想を解明する上で、重要な課題であるといえるだろう。

「ユダヤ人イエス」と近代ドイツ

久保田 浩

伝統的な「イエス」像を規定してきた教会的教義の信憑性が揺らぎ始める啓蒙期以降、「キリスト・イエス」に代わる「史的イエス」への模索が「学問」という装いで為されるようになっていく。本発表では、「学問性」を標榜しつつ「イエス」を「ユダヤ人」として言語的に表象する営為(ユダヤ教史家ヨーゼフ・クラウスナーと宗教史家ヤーコプ・ヴィルヘルム・ハウアーの「ユダヤ人イエス」像)を行為遂行の実践と捉え、一九三〇年代ドイツにおける宗教史的現象と看做し、「イエス」の「ユダヤ人」性は当該の時代の宗教的・文化的情况への実践的関与の為に創出された文脈であるという観点から論じる。

クラウスナー『ナザレのイエス』(一九二二年。原著はヘブライ語。独訳第一版一九三〇年、第二版一九三四年)は「イエス」研究の目的を、ユダヤ教的護教論によって歪められてきた「イエス」像を批判し、第二神殿期の政治的、経済的、精神的情况から「イエス」を説明することであると述べる。そして、「ナザレのイエス」は厳格な倫理規範を説いた「ファイリサイ派のラビ」であると結論付けられる。しかしクラウスナーは「民族的ユダヤ教」と「誇張されたユダヤ教」(「イエス」の倫理規範とそれに基づく「キリスト教」という対立図式を立て、後者は実現不可能な程に極度に理念化された倫理規範に基づいており、「民族」にとって危険極まりなく、「民族生活の破滅」

を齎すと糾弾する。他方ハウアーは、『アーリア的キリスト?』(一九三八年)で、「イエス」研究の目的は「イエス」の言行が「真のユダヤ精神」の表出であつて、「真のアーリア精神」には相応しくないことを「学問的」に確証することであるとする。彼は同時代のプロテスタント教会内で見られた「アーリア人イエス」の模索を「非学問的」であると批判し、「イエス」の言行は全て「純粋なユダヤ教」の表出であるとする。しかし、「民族的特質」を備えたユダヤ教から生まれた「イエス」の教説は、「非民族的或いは超民族的な特質」を持つに至り、「自然的秩序」(「民族」「血」)を否定することによって、「ユダヤ教」から拒絶されたとする。

両者の「ユダヤ人イエス」像は極めて興味深い形で共鳴している。両者が描き出す「ユダヤ人イエス」像には両価性(「イエス」の卓越性、誠実性、一貫性と、「イエス」の「非民族性」「非自然性」)が見られるが、それは両者の議論の根底にある二項対立的思考と密接に関連している。まず、肯定的であれ否定的であれ「ユダヤ人イエス」を担保する根拠として、「ユダヤ人イエス」対ヘレニズム的「異教徒パウロ」という対立図式が見られる。こうした図式によって、「真の純粋なユダヤ教」が前提されて、つまり概念的に創出されている。また、人間の生の全体性を包摂し、それを規定するものとしての包括的宗教と人間の生の一部へと縮減された所謂宗教と表現し得る対立図式も見られる(「民族的ユダヤ教」対「誇張されたユダヤ教」、「アーリア精神」対「キリスト教」キリスト教精神)。但しこの包括的宗教は現実的所与ではなく、彼らが望ましいとは看做

していない現実(世俗的なユダヤ人国家の建設、キリスト教が宗教的覇権を主張するドイツ社会)への否定的関与であると同時に、理念を可視的現実であるかのように見せる肯定的・積極的関与の言説であつた。またハウアーにとって、クラウスナーが説く「ユダヤ人イエス」は、「イエス」をユダヤ教の純粹形態と捉える根拠を提供し、非現実的「イエス」キリスト教に對して、「民族」という現実根ざした「アーリア精神」を對置させる可能性を提供したのである。

「ユダヤ人イエス」像は、学説史・学問史的に、或いはユダヤ・キリスト教間の「対話・和解」の歴史の中に位置づけることも可能である。けれどもその同じ表象は、その都度の歴史的脈絡の中において極めて多様な領域にわたる言説としても機能していたのである。

ルドルフ・オットーとデ・ヴェッテ

藁科 智恵

本発表では、ルドルフ・オットー(一八六九—一九三七)におけるデ・ヴェッテ理解を取り上げる。ルドルフ・オットーは、一九一七年に『聖なるもの—神的なものの觀念における非合理的なものとその合理的なものとの關係について』(Rudolf Otto, *Das Heilige: über das Irrationale in der Idee des Göttlichen und sein Verhältnis zum Rationalen* (Breslau: Trewendt und Granier, 1917)以下、『聖なるもの』)を出版